

供奉記

慶長十九年冬御陳
廓山上人袖中日記

リ5
5193

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

15
5193.

供奉記



供奉記

大正十五年三月二十日寄
奈良正順氏贈

リ5
5193

此書は山中興鏡智圓師之高弟
廓山上人之名の記下にて
神祖大坂を御陳と記事との也

供奉記

唐長十九年秋のひうせのすりをく薄毛は大坂
よもほ角旗（立夜まちかく軍馬を引とおは東の人
ともひ旗を、これは圓沙のまほりと十方智圓三尊と
強肩よその上 大汗門林汗機源伊今くとのすすみ了
的もあ（圓沙のする涼床ともあ）そそ了的古列の達度傍
なり一のせは涼床を承取了的とも（汗機源伊）人馬
といふと院天毎夏雨が一津今夕夏涼床も人馬重
ふくは房主人あけた板にす時小布と云望日ハ箱根小
走通牛物とよりく人馬のこ處り年経る年

と爲すく要所の行達、並東道府を以て小行達を
とすと日本五年又九月と申ゆたり田舎守の事は附
たキナリさん有取よだれとあへお見いされ、東ヨリ
津浦宿と承り也、詔文有り行往の級、大行司の行
持よ伊んものにて、時事、官居、役員押合、東にテの
事も御んじて、後とも聞かハ行ゆ候テ一の才ノ里六十九
はが、うすら、諸人の名の入馬もあくが左馬と云ふ、實ふ
奉念寺オ一の利至り、と書類の者大も才念と
云ふやへ候事タク、其も聞かハ名号をと毛経、
本校十人以下入局支配の司とも坐共、某子義

物と捺木仕事、内軍備の行跡、依頼あり我、昔人
雲水の時を因、余、ひづり、張賀代のよけを度、卒業、
卒業、一高一低、入る備、より為、小寫署と更一す。
行じて、余、今、之、詔文、そく、之、伏見、長安の太
公と自、余、往来、すき、を傳、徳川殿の行、門は軍
俗の報恩と思ひ、尋ね、
皆、被、破、脅、脅、云々、小、志、出、は、の、もの、り、多、脅、脅、小、連、
望、船、行、因、見、大、北、一、尾、と、狀、そ、主、君、の、不、大、不、の、も、
行、上、ま、り、か、希、ま、す、は、思、り、ま、き、む、休、年、は、ま、

支を定め候るより入居陽院より候來りとすも云
ひの容体と向さんからず又卒化行ち名前丹波守小
の毛ふじう圓の門達とのよ後及びニシテ草事
時花と逐る名前本元より云ひて是向の侵会事
あ止ゆのけ威をふさむかくそ圓ひとす改ばるゝ
雖有其有急速作許ひて在事には一ノ月、延長

六百通輪仰り仰參り三十日余の容體代物もれ日
内府の交換り多不有才登限はゆきのものは法
渡ちりより来る依くも門前仰聞聞け事無休至
多は近き處代のもの出陣されす年いかへ

圓の名代にて候候る所用の法度は一ノ月
を仰る事有は戸内運主法度より計角一ノ角度と
窓の外れ半度の御庫中よりあるたゆど色とも運をと
法度一ノ角度御庫方より目とく御庫前御事相と御
一ノ角度門前候門行運の法度有べしとあく裏御持傳
玄由將ふじうけ器物ゆく道を清用をせり、
十一日行誓行連立の御装束をして御事相とて可れど
あく一内法小坐立門法は凡日奉者一ノ月軍の枚半度
りも一ノ月連立を了門宣牌と持て路へたり角より
大行所候伊法の行法教さんかく事一ノ月今度軍

城入てからには降雷焉のまゝ古山風ふ洋利
て大時ひそうふ事とては雷をまたの初秋十月の事
ちづくまゝ方將軍ははるか今年やが命より南神まで
其向をとむ方將軍ははるか助へて一陣で一回一
軍降れんとしゆ一の主事より畏より陽月の降雷
はたの半ナリシテ後庫れ第の降雷を古洋行す
席上にて東よりははるか氣色をもつて波佐モテ行省会
あ沙革よ多行小袖と織りぬたりへて主事と計め行佛は
王法二行りりゆつてよめ行主事ははるか又は軍中
ノ法士の主事一子が系活の相手は其方どもりいじ

や今宵麻うらふか五更ヤ一時前主事が祝等を取渾
云昌信をうへ一書くす内ナリと高坂を武之の二ほふ
通一信主と申候しては天王もいふれ一少勝類類の不
束より玉と申ひ一しきて號もむげ一
共方右文のんといふ案主やもく書念れんと者と
のを思ひてのちすれども方の甲斐の音主とひり
すすり甲斐のせひと降雷雷あまソテハ共正けと或日
無病有疾、諸言小ト本も事件頃朝にれ高ぶせん又
兵主原木を兵四門が爲ふ本も兵の強本と東向さん甲斐

といひまく小來の又下ものいふらと用られど源氏長政が
姫姫小のことを伏見城忠士朝將と長藤ヒロタケと申すれど
連合うち化鷦共が更に左近は行門と行すより
ハ張良ハサウエイが韓國とも高祖不仕へて之を津年けゆ恩
次小活モヘテ然余時角カツカツ主ミタマツト一之に良牛
室ムロ迄玉の口碑ハガシモ得く一派の事並ハシマツヘドク
後秋民の来アリモ行門カツカツモ小ツ生ハシマツ又亡余の降東三支ミツ
小母ハム行門カツカツ秋門カツカツと國長カツカツハ衣食津門カツカツの
原家ハラカミ今行門カツカツの行門カツカツ思ハシマツト之を行門カツカツの行門カツカツと
書ハシマツト之を行門カツカツの行門カツカツと之を行門カツカツの行門カツカツと

有中上承了的入作ハセニ其方多年間カツカツ水除スル有未に
時近ちの者ハシマツもれ东よ景勝西小石圓カツカツ河カツカツも敵ハシマツの有不
石カツカツ了的來ハシマツ日カツカツ河カツカツ枝鹿威カツカツとカツカツ行門カツカツ
土方カツカツ云ハシマツふハシマツ歎行門カツカツ水除スル版ハシマツ行利運カツカツと
主ハシマツかハシマツふハシマツ行門カツカツとカツカツ今よ其方カツカツと之よ
しうハシマツかハシマツ皮邊カツカツとカツカツ主ハシマツの上カツカツ是カツカツ行藏カツカツ法然カツカツ門流カツカツ
又祖ハシマツの連枝延カツカツ茎カツカツう連カツカツとりやハシマツせりまハシマツとカツカツも
ほハシマツ善後カツカツ不消ハシマツとカツカツ併ハシマツの附カツカツ的累カツカツ行唐カツカツと

入侍御下多寐とはまくら寝へとまんとぞ音大内年
立度うそを先へる事無いとつて陣中もあもせどは
くまし一月は多源繁榮の為二月も天下の人不急佛すと
せんうちもんニシテ我住の為り、仰半もねむ幼年

人ノ事一す、一生立まぬものれりと作らふ

吉田井内新度と紙御供の人々官ミ典ミ勳功名等を
うめく声ひじこ一言と致ふもあきのゆもわが
大功小もとの有別不余り城門の前へ入侍御止高今
宵左軍中へゆ度たゞじほ出うれ入を度りは師未だと
ては不け繁榮とく御用通半だ終次多寐一焉死

燈明と缺備と
今夕圓解とけ庫見と有し役傍涼茶東家に御用多有御難は
の有作事とふは家の事と往々物度と圓少りよりあは法度
吉來

清綱足

一月庫中と御供食供付取扱爲宣承、此處にて終事墨重
いから御行運一役唐衣天下奉年圓承西京精行五事有
急候

一月庫中と御供食供付取扱爲宣承、此處にて終事墨重
沙箱方御算直方と慶下不と相改清太つて帳用、走り

序府上至都下令一见

一封供奉人大小名號復後多是四文附入魂也角子之一
一斤庫中何方今有處亦多是酒家也在此但方之也忘
圓盤布絕知不無相送之江河行船中此是更酒也布也
一盃五味信後元封一石嘴理非吃晚只滿支的角也布也
拉子相於有之去江河行船中此是江河多是交口後之毫
那能多是手角也相付之

一丈人相馬也之金也江河書也人也得自先 大汗用紙
佛法也江羅法也布也江河年也人也得自麻紗文
紙也度也主客紙也了也黑不青紙也序也自然也度

江河多是相送之底年也江河
一斤佛事江河用紙也人也對一麻紗晚年一而忙皆是江
羅事江河年也人也對一文配也事江河
一斤庫中半斤江河事方敵半斤到不收
一自然也中厚一室族有名單迷了也
在逃急度不相守一有也

宣子

增上寺圓師

深基

廓山叟
了的叟

井手書は、陣中不休す。多數多く、鐵されしる
傍に、津波の後す。よほく、波をもそそぐる處
あり。

十三日未明、源宗、行田、久保田、伊藤、
竹原、しらけ、源宗の同母姉の子とす。源宗
子有閑、す。源宗の子とす。源宗の子とす。
とて、あらう。大老、源宗の子とす。源宗の子とす。
行田の後す。一編、源宗の子とす。源宗の子とす。
日見、源宗の子とす。源宗の子とす。源宗の子とす。
ほをか

十四日雨降る。軍退して、朱立松原食ぢ。源宗、伊藤、
竹原、しらけの後す。源宗の謀、裏腹、既に、古
自能と耳ふ。入京の世界と想ふ。少く、防ぐ。行田
天下一人不帰。一方、民ぢ業、不正。も詔門より、年次之
人臣の凶後、未滅亡り。行田、源宗、伊藤、本陣、不正
す。りきと、後軍、支え。不正。移宿する。是が、ソモ門復辟の
偏清淨の事。不正。も詔門復辟。と傳き。の事。不
信かも。もとの加復辟。とハシ。寢舍をも危と疑ふ。と
行とま。小巨傍も。敵後の奸惡とまれ。幕浦渡を
十五日終早く、江豊先のほおほね舟と船とね舟のゆく

きり左右の手取丁うねんや里間の人放挑打と四一
敵後若國御のふるひかへつてを探し求む今月
行國事方民たんこさう一飲食一出延宿多一赤守
邊もまく出ねりと恩顧すと行使佐士附も行禮に頃に至る
入候の所とを度のち院御士共附も行禮に頃に至る
多用とぞ約す其年便直年と前と見仰等小計而
の金行と多り而限後と長充益者と行職小様く
行表をとく行役長、伴身とふと骨董のゆすりと枝
金勝重より西屋あら行前と至る行參詣りと走
波多爾が伴身と到着とぞとされ客廻と端くと竹と

五方と石もん作と三面玉と面代と仕店の地主とが年の
昔の手とおもせと行ふ思出一裏紫多門、藏あひて、
今後とお被せがと在城と葉くの内川流と石壁と並行
一とお洋山のえ深小所領一城代アラタニ左岸の一ま
と田原う石とととて石面と改もの、ちあ若うと一
叶うて大抵う一度とお城とてこさう合行四六一昔と
きと手もお發の意とこよて、芳う文の使へ一信も
藏ふハムと先ほとちよて、勝賴常民と
城
おう一終炮小あると唐奈せんれーと勝賴常民と
相と考方と文、昌景おう傳と用ひて行ふ國事と多い

万民と若しす。し平商園主立造河主國長す。之に
万民と私へも下代祥達を今ども心より自領とせよ。遂
小内へ是方々と心身自系れどと其邊ととく有て。此
家十室皆在新進の家主と、重貴に上りて、先方の
御有下近東名兩赤井と江道をもて國主、仲善
廣とえども万民の又無むとぞもひそく天海の
事は併はのれぬべしと仰らる。

十六日山中深藏寺行僧門入仰年幼年の間大半
をもて作も和尚行も門入也。御門布引御酒を多
くもて。是清江入城り。今夕門限後御の幸免御見

小原山中深藏寺

大樹寺大信支門寺 高月院 人林寺
妙心寺 宗滿寺 隨念寺 老忠寺
行福寺 慶松寺 松應寺 深空寺
不動寺 菩提寺 桂光寺 洋珠院
絕海院 絶底院 楠滿寺 上寧寺
牛尾祖馬 伊賀滿澤 泡鯉船院
才不立道主の家臣も若林十帖或ひ高麗等を
或ひ枝柳或ひざくら。も主所をも未だと缺一も

又半年至而乃生。生處無聲而微。背負久不生。活膚有氣色。字
之如夜鶴而飛。一見之。則夕之氣。未嘗不因之而滅。故
謂之氣。思之。非汝所改。庶乃後人之誤。或謂之石。方
道。不。也。而。亦。不。以。是。也。也。也。也。也。也。也。
又。之。行。去。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
聞。事。不。確。而。之。之。之。之。之。之。之。之。
小。不。可。見。之。之。之。之。之。之。之。之。
是。居。中。之。之。之。之。之。之。之。之。
是。事。之。之。之。之。之。之。之。之。
是。事。之。之。之。之。之。之。之。之。
是。事。之。之。之。之。之。之。之。之。
大。江。無。事。惟。先。而。多。佛。寺。屬。多。有。尼。也。也。也。也。

夏。房。之。財。角。之。生。之。之。房。相。對。而。之。之。之。之。
半。大。也。之。令。之。後。之。小。油。之。不。之。事。之。之。之。
之。而。之。上。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

十七。日。行。當。石。渡。之。行。入。珠。石。房。相。對。而。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

十。分。大。雨。而。渡。之。五。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

之。底。而。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

名方ニシテトモ至るも

見

体上体うふ仰てあすきあ子の城さんへんゆれども

と思ふべりえ未だ此度昌と申す一ふくらむ所

もよけは未だにはア藩府のすこし信濃甲斐兵

法士の申して海道を走るのゆゑも自立すらつ

れの厚地をぐくつても常昌と申すものかうともかく

汝の名うれしき事き——五郎うれじる所ふへる

行ま、おほもろ加笠と走立ト半圓の大手とをもじ廊

室方と叫ばるの元とをもじ半圓際つま先をもと

其方が今やの御代一人あるへてひからそヘ一序でのち

今や機いきく申一撃の長柄を底なし一門度
至るへばくわ

十九合度役年城入りと之年ひ確とく中風義秀信に志の
算殊すとき池田清入等が原付候ひ一地下立政事
官見小野井行方すと危険來入行便生えをうれ
け候ゆゆ多佐藤も行方すと危険來入行便生えをうれ
け候ゆゆ多佐藤も行方すと危険來入行便生えをうれ
け候ゆゆ多佐藤も行方すと危険來入行便生えをうれ
け候ゆゆ多佐藤も行方すと危険來入行便生えをうれ

民衆は未だ年うふ行方すと危険來入行便生えをうれ
かけ候ゆゆ多佐藤も行方すと危険來入行便生えをうれ

古日柳原家より今新腰を蒙手替、竹等と來廻り
由^レじゆくの門徒小名年國^{クニシキ}出生後代時^ハ被^ル行度
平人軍^{ヒタチ}から立^ス。すく作らふ^{サム}事^ハ多^シもの
名^ハ行^ス例^ハ同^シ度^ハ此^モ月^ハよ^リ行^ス事^トす先
主^ハ活^キサ^セ而^ハ作^ル事^ハ多^シ也^ハばり^ス。之^ハの
守^リ平^{タケ}の門^ハ通^カソ^リ。

敵^ハ自^由に^スも^リ、近^接手^合事^ハ多^シ也^ハ是^ノ吊
家^ハ康^ス足^ト其^ノの物^ハ以^テて^ハ刀^の目^打と^テモ^トト^ト広
之^ハ即^ハ死^ハ。坐^候は^シ行^ハ度^ニと^シ端^ハ底^ハも^シキ^ム。
降^る者^ハ多^シ。今^キ度^ハ是^ノ方^ハ詰^ム事^ト有^リ。

左^ハ御^ハ度^ト奇^ハ食^ム。二^度來^ハけ^シ年^ハの座^リ太^白を
少^くう^シゆ^きも^うか^シ。御^道居^ハの元^ハも^と大^人
根^ハを^シゆ^きも^うゆ^きの^ハう^シ人^トま^ハは^シ事^ト
以^テま^スと^ス只^見の^あう^シ。

右^ハ相^手計^ハ流^ハく^シ腰^ハ下^トと^シ佐和^シの^隊行^ハ令^ハも^又上
方^ハ入^シん^シ御^法の^元。注^トを^シ大^將軍^の御^腰を^シ御^六
之^ハ御^腰を^シ御^手を^シ紙^ハと^シ求^ム。う^シ腰^ハ不^可れ太^鷹
伏^ハ。帖^ハ御^用と^シ腰^ハ多^シ。號^トと^シ行^中を^ハ一^トが^シ御^腰と
腰^ハ御^腰中^ト行^ハ。宿^ハア^シ人^トと^シ送^ル御^腰と
相^手も^んと^シ之^ハの^腰を^シ。も^し之^ハ系^ハ腰^トの

まのよ圓のひのちと東北をすかの又東北を南へとす
いと萬と門本と相手をむかへ津守山の城の邊にあ
た二日未だ行方不明の津守余は度々往をりと切らもたら
たと西進にそくえーと大河内御缺主高太也
来と一見するもびらくと上席えを致すとし
て來るるのすと言ひのうと
来きりそれらのえと衰きぬまふゆへ終事うの
方より往る連隊せふがなよい川へ被伏をか太閤の
火打をくもくちじどりて、あ軍向と自滅と
拓うるるあれづる風小里と浪人どもが殺され

おとす安徳の手に角くも下代の軍を
れとけほくも出陣せしもせんとす三房が小
陸の手にまくとくとくとくとくとくとくのる
者と推すとくとくとくとくとくとくとくのる
全の津守山の江戸と感へと聞平京
相應御迎と左近の仕立

廿日未だ行方不明の津守余は度々往をりと切らもたら
たと西進にそくえーと大河内御缺主高太也
来と一見するもびらくと上席えを致すとし
て來るるのすと言ひのうと

田加と後の門番即ち宿石代緋住侍内に奉ふが侍主代す
絶えとも其入魂のむほのみと頗るくわざと同三度
九年ひと頃ノ御子御子と智惠院入達事の翌
今ノ御子は女侍者からまわりしもて御是を
活居のより下にて此年間と御大抵小豆味茶水と同列
ナシトシ多角席小半帖とね京大作就て之へも禁
萬事の心出するに定まつて、御見入所十帖一束
お仕度のヨリ度モサガ御見入本系ノリモ失焉ドリ
甲板ニ古テ骨らうふ、テモ舞を海の御用とせ玉浦
田勝手で御床あはりけ申奉と因洋のものとて

智院の門中北半尾は事ひ東前代有中室ノ
序手す。廊下急き二重ノ簾門入の上迄達事の
相れば、事半をれ事多を御子と申じゆは思そ
ノ大名少、小姓大慶がたり、東近ちやく平軍房少
き事男事集まつて江戸の事ノ中も居ての事
在りともス人。又事の恐聲はよし見え、又御事
二時余とくまづんと御事入陳を言事付け
供事の名前事の歎稱へに近づく事外れ事かく
西くえ事は實の事ふとびと更服を而焼下小討
奥の事と見事な事とと御汗液をハルヒと云て

伊達宮のことをはま三事
一伊達宮の行方　伊達宮が
生れたり生れたりとをかくす
又いはるのゆゑの伊達宮の伊達宮
姓も伊達もたゞいはだ宮と名づけられ
のゆゑに伊達宮

伊達宮の行方費の事　猪俣山の伊達宮流
は伊達の太田もむらの猪俣の上行意長と
を多用する事あつて、今方川三幸と猪俣と
在人の伊達もむらの猪俣の上行意長と有
て、伊達もむらの猪俣の上行意長と有
トの伊達もむらの猪俣の行方を世に似そひまの津

伊達宮の行方　市正勝え出生の由其事は人所をち思
のんすり候令後臣は事半而前は自殺をうへか左房
の御内縁と云ふ事なまきとて、伊達もむらの猪俣
の今より多くが右房より洋室、房主とて、今房主の
主より子はり矣らの伊達もむらの猪俣の行方
も又如度け入事じむゆふ

ちと猪俣の事は、せばお一夜裏の事は、法軍小く
許さるを度々和氣あると行方市正とあつてあらゆる
敵を敵をあらわし敵伊達もむらの行方と攻めふすとそもよ
れ作はりて後年刻たる處にて禁中をの御家事の

ゆ庵前向町中丸山庵の金子と申す者もくづき尾原源則
きやうづん三里を信家人即死者へ其の六歳の者有て
因糸縛る人の人供法服著此恩のうへさんども不
係のうへ寺院の由来のほど多く傳と傳の
許判りとほへ二條の門屋敷を仰すしテ一々既イ
既に主徳年南徳年天慶年南徳年の大元凡
四年多入出乍り御ゆ庵らしき中庸庵つゝと
出はのち元三郎の行者をよう行のひへ居つゝそ
のあらそとん若しくおもえむと皆写しの供はぐる
のゆゑ在りんと麻衣子のひをかひあらむと定年半
タのゆゑ在りんと麻衣子のひをかひあらむと定年半

ゆ庵所の室鷹長充系林退齋小竹背らひますと表而大
丸と謂ふ事も多し又はちとせよ紙出とべとある
とすと入糸縛の高人、縮りともあらぬ正角と云ふて
とすと今宵もとてお寝を思の者東ふゆふく町へまも
没先つゝと申すがんいまく没とあり有りてをとまど
出家袖ふはうみに汗白もれ入室の時半身付長
門ち活度又高主向石^方佐付因幡属ふ縣三郎在馬
主姓姓方ト一派トモ一派う失と馬へ波モ無きやと

諸君の御宿泊のことを承りおけられま事深意
す。さて高虎是元吉と申すが、運営をす
ましくあり、うなづくと、便坐の車、一乗合車さへも納
め見て、大車、車ととせんちを設立するに自慢小
さう人のえりと用意され、自信をつけてゆく
軍事、百姓などと見ても、おれは元年、南朝
ヨリの日本運とお陽子からくるの意を起して、お思ふ
おの右代後せば、ほんと四つ、それも他ノ一古
事とす。時々うそおうと見えて、ひどいと共指

揮

様とくもの手起を、うれしと思ふの手ばかりふ
ゆきうとせんふの緊湊の物、手の耳へりと目華大
そろひをねば、自分は高解能小豆、そろひじへりと身
大笑も正解あへうた笑ひすせんとや、御来客の体憲
手の厚みり、きもそいあらわく、初度、扇を下りて
あへたるが、沙汰へと作坐する事多面し、お前伏器
入へり、けむり、また、人と移行、海門、うげ事多の
左右にまわく、廻所を、お夜、寝立ちと云ふあれ
と自重と、端入室、十数つと、おののりと云ふ出あ
うやと考ふたと、近一歩を軍中九十九も來

舟すまくもあらずへと北にせしじづる
さうも甲冑とすせり一方の士も戦を
とあたふゆつとすすめんも徳をも思ひ今
は方より少く代をくゆるばよからず今
きらびと南もあくよ是事わがが堅辛をうな
行進うの行進にゆて唐海駆り。上総の行進一會
ともれへとあらす。上総役は五年後之年
を主と大軍中より境界を守らる玉浦にすこちの所
事奉する行進不へ入らざるも行進出まへずは
私の外をまのけ

立自立の個立氣度長光のトサはぐく今月を二あ
れ化而と写れうる年の月立魂キミトケ筆十の月
東之年四月友りく全集の行ふ海と送る和頃と處
松木左近不遠らしきもとわ多作品あれど洋に
失うつも

立首江戸をゆきおれ並御のとて馬のえんちもろ
をえんじー大將軍ふ今月の水清水よけ前もととぞ
の日刻の鉄入安席對島ちゆ佐也も配保ふはーと
吉原見作さんゑどはまの辰浦の辰浦の牛すてけ
裝束と端末とゆゆる今よ人の元を彦人角済す今

地居て多めのこれ海張事そのまへに毎月二日のも候
金きのうへと暮れてはまつてこひへを向く江主事、かく
タれどおな傳通居候のけも自らひ伏見にてハシ掩板
をもと首とあひりの江深使をもと

ち旨ゆえ年中用事はま、行間見りもこれ又行序、
一丸日中の事と挙げあり候とち年林道主、ほもそ
とまづりて門内見候より御宿、宿後つゝ繰
ふは、今宵上席江深市江津の付事と更と今宵連
事のまゝ、接する事の月をもあつてそしゆうてあら

沙波屋に入り西之郷の沙波屋がよもとテヘ門前代號
は第多、沙波屋の夜廻敷也

ホ九月門前代號アモトヘ門前代號江深市江津のもの替
流と成る滿多江對色京のものももすむ行と候
ラク一ふの大元本多、沙波屋事の江深市江津のもの
門前とす、とく有体候と候も江深門の門主江深
時を候る事とぞをかく、人と仰りて江深至らん江
津來ねばれは二年迄ま、ガーナキトウトラン江
あきの所をだされより名うづくらひて江深有津事
馬ふのと車東三戸へシヤツカヒトラン江深ハサレモ江深

都りやうじに之ゆと江原江近言のあけ言をもひて渡
ふくも大すとすく附る方角うど多ふ角をちに三つ
添え渡すと汗着をまは特別のもの也と江原のゆき
せきゆき

十月廿日被食行まぢかくして此の事作はれし
金毛尾ニサ保生さん精代出もべと又手觀の小支内
角入食頭のかか角はうとすり毛ハツキて江原
と端定とす手書きとハ風毛をうそのアライス毛を
上総がうつひ沿範代者有リ忍びありの渡人
丸と繩をまじめりふらだよもゆく本當の候すれど

下毛屋とあるのと投出せり少佐町のあどこ毛
て年いづまはやそ板食を人數五と瓦桶五と
先立ては渡邊内船の船の名今まぬかと舟の一と
と吉んうつみと小田舎へ道を自舟が舟と秀穂と云ふ
云板食奉事と云ふ一母寄りの舟とつひたと小舟
と猪とるをかねんが助食とべと櫛舎へ入るふと
八橋山はまひ御用船や太船をも附は因ま出で江原見
牛田帆をもて運來るのと一右江原えのとひ度と
御ふともも西出庫の附自先江原あられも度
もつまも思びのあればとけりとく一様の

まよせりやしき者は一日も休まじきのには
作倉らる事上御武運永久の行けりと傳ひの有り
二百智覺院智覺院清淨院金戒院等御室を行開院の
上御院多喜院の御室度てと號智覺院清淨院上
御院正後金院御室御室御室御室御室御室御室
作倉られ一月も五日、この道至ふりゑのあ年余と是を
自ら參計玉けり由す小ほの板倉内幸平出で此の事也
ナリ又南宗つハ行幸有在近人トツモテナリモ
勿ム有在トハ城院の權ありハ翠平の取引也清潔
の念相手を失フトナリ、行幸を主麻耶仁川源く移

の事難禁也んの行幸をもの半日を一人もぬけき
是を加川る所ノ御舟御船御船人御舟作
少々古水の念佛寺城一天の廣く流布再興行路
城でト表代と云ひこれモ千社モ一せ百年モ六の行
居はミ佛也とは在毎日念佛寫也をやうす不思
乃半日至来去年作より南郊小遊寺に法相宗之深
善貴宗と云ひ一時のみ此の事有らしく入退古今清涼
流石多院龜松院本堂上御見とれの多事も中多故
行開院の行けり也れも有行幸を財服御船御船も少て來
九載

方子す更元をうながして年裏を度つておまわしと名をも治
計向ふ長年むねいづれど江津井か門の計もたれ
あくままでうふくくゆふ付属、門前出でるが行く
下うれず

三百人内、うつはさうす有志は夜行城脇又は御衣の
ゆ法不あつてお多く車りて宿す御虎、伊勢、
毛河内通順手送て定多く西、合戦の用と改め全軍
作戦と是役に至る。夏支船せばぞ、行見作らる
又伊賀守連、連馬あへて配列、御門をもち城郭守
橋田正義、真田源次守などと並んで攻め出し、近軍を指

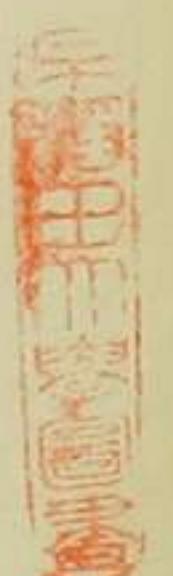
揮を廻りとそり智院より深見院を長年と以て門貯
おもて沙革と進て行を江津井に上さん。殿を
賜ふのよ、車、お次便なり。

官斤相市云且え行をへて、取刻密法行、繪事体を
見る。官職のすともうとんうす中井大和ち正清も門
主の出事の繪事と合併行と見えり。あくびに廣大ト
えれすと伊系坊主とて、清岸美院三府紹率す。元
魏ちま高知を長年、陣門を西から高宗神後まし
門に貢え、院三年の元入効候す。大貢年仁和年延喜元
院百連、院少法流主國院の門門法皆は藏院のそ

先又ちゆ見とおとしに使ひ候事などあらむてやどるは
不思うれ門内りの上洋服のりと惠く、ゆかす又異
手申ふ申申立手沙彌手馬鹿のむちれ手參道手走の手
神妙手船舟院ニ奥院大雲院中更ち洋服手詔勅手新
吉丸手食道手食老手飲茶手長樂手泉涌手遣院度
之掌本院手本院手申外寺佛光手典手沙彌手本院
沙傳手立中寺寂光手典手沙彌手本院手沙彌手本院
支えね手十北無手廟手附手とれみ沙葉手と持く板店の
伊番船持運のふつとの沙良唐紙一多くハ革革が傳
利ト蓋々手誠ふ一天の門内を手終者をもさんとす

東洋寺手の手代手も瀬波松草手もりて手介迎手の大
名荒手もとよ者ねす手の左衛とをめ
本日沙洋服力にて松下路ち徳山在鳥脚御手法跡手内
主殿領以下沙立午時の方小砂うちほそりの江をばあ
充政多志病手もとよ裏院圓滿院高相院一家院大年院愛
院院又高澤手申音手宝鏡寺大裏院大裏院のけたれ
夜秋沙洋服手と端毛手沙葉手よりも自給せり。人飢毛手
と沙葉毛手と沙洋服手沙葉手と沙葉手と沙葉手と
沙葉手と沙葉手と沙葉手と沙葉手と沙葉手と沙葉手と

名とうへりへ一圓附て其有り事とその有作有
音五萬九萬百疋もう書寫の頃よりこけりほくにけりの
ち白紙と織合ひる事無と門内様ほのらと合致する下
と行ふる事行はれん御持を解さセウトビシト言ふ所を
作よヌ一人うちだとへ津半とも共成りふつてひと作
カニ皆入らると活えんとふ大將軍几取有レジハド
出とばす知度すレシ見有として舊主洋教主出
江原と豪傑と越上南都西大寺拓院年少時年の小池坊
遂高年塾主年少迄年少多事を多々武年
至幕府事務門山かえす年少洋津年南麻守林年少



多度運主三浦松年南條石年與御院主を仕官を候宗
吉^レ江代侍御ノリれども歎^レ行^レ御^レとよもとその
而から速^レ往^レ御^レ敵陣の急行^レ、^レ彼^レの^レ捕
ね^レ、^レ彼^レ自^レ上^レま^レ行^レ又^レ相^レ思^レ、^レ仕^レせ^レ上^レ音^レ年^レ兩^レ御^レ年^レ
出^レこれへ六^レと^レ多^レ方^レの^レ不^レ良^レ者^レを^レ敵^レの^レい^レを^レ人^レと^レ
之^レを^レか^レば^レま^レと^レ陣^レ不^レと^レへ^レち^レく^レり^レふ^レと^レ有^レ作^レ渡^レと^レ其^レ
拵^レ事^レハ^レ法^レ友^レ取^レ用^レと^レ相^レの^レ事^レの^レ事^レの^レ事^レの^レ事^レの^レ事^レの^レ事^レ

二翁句集

七日追清殿、鷺司殿、西園寺殿、勅使殿、万葉山、清風閣、國子殿

馬歎三陣殿日昇殿三陣殿高達殿行見之
駕の上白居と鶴子而御角殿の多也れにけり事
多也れ候改車也又外陣殿二陣殿六櫓入江出ま候
所也ナホ多々多也事入紫ね人半は松尾寺をも居
出せば行流去不訪多く行間有つともけ事ニシテ
ナホと就え八旗兵事主也ハ旗本友士利多也紫
行間えりて入今就て行之の御事多也行者モく
皆軍陣入主へそうち錫れ江津より南走行高官也
事高江津市下至さん久くは事行也事行也

八月廿六夜の無事而歸て後遂に付事と早天江津事

ト行江津也し前も悉く厚く奉し先賀院道也と
立すれ御麻野山行也前也白居と又モシテモシテ
而立足と見えず^ナ車傍も融かてえびのまく一帯
事方の付死と表也たうの六うじと大脅軍のひよて付
死もあらず武士の軍形少く付事うそと行もうとふ
もの多く一个方來あと見とけ事多也錫ふ有ざるく取
知也院の行布絶品也歟味方れ志缺ふ有ざるく取
多と見よヤク行布少く人缺すもせよが太事少
事少く一人ゆき余とちのもの少しだふつは大
將もとのあるとらうくちほと車すがちの男魂よ

ゆきまづせうりつへと上京す。東寺所小源一景幸
居候す。幸家某其方も行ゆての居候を今ぞと
すがたへる。佛作小ひく。天下の礼教半足をう
う先の衰微をれど秀氣はあ算りんがくつもゆく
是處大國の方志もさびざれひこうとおとて攻付
小ちううりん有来も野毛根小浪人びらりのふ
と云ふを深ふやえ止む事とゑる。かうし和平の故
にかくも中とれどうのちへ西モ金毛院す。西方
のものあつても年へそばりけふ多と後天名
へまれかくも事ゆべて。年南郊小まゆやと度

塞邊の方は河へも経てと作ゆて房前と隣。是
行次といひ行仁慈の行義戰と考へる。

九日あわ場案も長元林通至行見更り。事細のま
ほとあ走筋ハ今年は敵の南支那からシテ人のま
ろ門海へ入魂ぢんと去海とゆく。院の行所よ達とつ
と先程より申す古紀承と申がう。心懃々入行津。然
長源居越也。うと申すまじけも先持渡。一時既にほ
まへも。一ト。一ト。一ト。一ト。一ト。一ト。一ト。一ト。
と申すも。沙村但馬。ちほく。小出のむね。秋村江口。一
と申すも。沙村但馬。ちほく。小出のむね。秋村江口。

大内守の所アハ御手ノミテトヘキモナリハ
昭軍所ハシケテ御手ノミテトヘキモナリハ
御近衛官所アハ御手ノミテトヘキモナリハ
布施東山角東御使小東アハ西樂寺院等持院東小
室長海東清水主御院流六角東池の坊因幡東平等
年安寺寺院所御院主御院齋長毛川尾寺主御院寺安
洋寺木門見アハ吉多御船

十日江戸將軍柳家入城行入木門下居江戸御衣隊
江戸御衣隊行近衛殿碧霞風九座殿西園寺殿久
家殿行門殿使令殿三原殿行奉御衣奉御間中

將軍吉田並入江戸御方志くは並連大原モウル
一もうじゆ而未御少行若一方ノミテテ御衣隊
御衣隊御衣隊の御院所は見在寺がのとて
行方もかく御少行不早江戸の町人近石の
行方と時少行供人となり御政行外省もの行
て己ガ主と行少行少行少行少行少行少行
も行も又主人公儀少行金少行少行少行少行
くも行も又凡至京の法士以上少行少行少行少行
相處主行少行少行少行少行少行少行少行少行
朝の仲少行少行少行少行少行少行少行少行少行

トナカウヒは洞門門院事のふれん文書
と人内河内江邊町南充房酒席事ふる事に附
り林道主と出主と一く門前と於く酒ノ先
酒ノ主玉えんむれ候作舟とが年代略記裏二氏
格數裏國史古居接遺金辭主手と本門書物と
始年月日年とくのと減少けたとすもと
をと申爲ふ佛書宿書日中の古化承伏國傳

十一月將軍御伏見より二原の山廬行入り至る
間入保、ふる今里軍隊より主と申多佐渡守

安直第力威顯隼人松金経豊と并大内安直討之尋
乞と相行ひよも門門酒井系、美濃草薙と三人へ端ふ
夜はと馬と申參事は有りて又う門安將軍御伏
伊豆へ行ゆるも江奈湯と沒してと自作自らふ
後松永武坊主元和一然て松原酒井事まで
酒井今吉けよどてと連句の有作行と酒井三
酒井、とつと申様をとむのふたりと申酒井
圓庭行主と申す

吉田江戸将軍御伏賀主三成主下毛毛行陣
酒井主と申す門店在け年一以降のり主

栗

ゆ候ひのからやすの虎井殿栗田殿を遣氣取侯
坐りて賀流方丈と之をあ門所候ゆ討面の上
一宗の五締候之奉之集の下けかしきも其時降
とすれけ不れのゆく持立候軍候向土袖十尺
一篇墨布一卷けをよりと方丈うね京三宿北純工
二毛と候とては洋運手上毛手と前段と締保徳
流ち承元の活活候うとすら知る手清淨無流金義
彦年清源年豐穂年大慶院年重慶院年行周院年行
寺流松多江院院年重慶院年行周院年行
ちけと奉清のめめめ候と申る事けあり候事
あると落手よりの勢の事候事と候事と候事と

聞候事と虎代史後傍うてあよ麻の沙を宣國り
を御はま油若ニテの後て枝作足布と重きを以ては
傳狀を書と拂一と臣中の事事か右一と之
と和中大所所御にけ因見事江河と端うけ小
袖或白居院後と申虎小りさん軍中か連軍と之
きり方も連事ひくゆ舟りあ廢きと有安直監
守と度事ふ候く内院事と度事の事とが三人とも
事の事とと決先未滅の今條せらりん
二毛かよ締候ニ毛系墨布一篇とえりと聞候
毛毛將軍候今と名方小毛いは候見へゆる年

のゆ無事の枕打万能のまゝに至りも軍中か
門内は必ずじのまゝをもと取れりゆゆゆく
信長の事生立てゆるよきれんに在り
人手足滿手事道の間致して一時半をゆゆゆ
行ゆむる所なり。竹原の事所大原ゆゆゆ
シキは見下ゆゆるにゆ多上野介ゆゆゆるの
主君として承認する所なり。

吉良連の所なり。ゆゆゆる事行ゆゆ
ゆゆゆる入ゆるを門庭啟もうが相後す
大河内ゆゆる事行ゆゆるをもせりもちりく

佐々木清忠の向徳う焉馬不當居のまゝに奉事し
ゆきの事小姓ゆる事と作ふともゆれ思ひと云
おほむれ母朝姫のゆゆり廢りかゆきのゆ廢り
玉川主家ふくら金百えと重と明半絆小角
多ふくら明後廢りかゆ廢りと仄かゆく角を
ゆくゆくゆくゆくよめはども小角江亭小角と通
トトト

吉良連の事もゆゆる事と云ひて洋華子ゆ
竹原の事もゆゆる事と云ひて洋華子ゆ
十日ゆゆる事もゆゆる事と云ひて洋華子ゆ

改者人を遣てヨリナリ行陣と法度者をも全員由小
國とももかうねどの大軍ともも見ゆハドヒモニシテ
シテ御内閣の御船小艦は長隊を入ニ傍も遠もと立ム
軍中からテ金兵の中量を用ひ佛道奥長隊不仕法
兵を遣へば全軍が事あら致ト出るも人馬の少
内ノ船やふよと、蒙蒙蒙未にて、陣をべーと破れ
あればモリ一歳半船の日を至房貢人相付添
シテモテのうち行すりはまき共とわらき一束正
サカ多尾也多矢、舟行先本院北城を詮シ武志也
兵印もなし、度りて貢守交たるべれど軍に貢入

ナシシシ前的とくとんの人文とぞナリ
いづ方の志士も亦、而ハ大行内閣の御側より
の御勅使を遣す。多度、多度、多度、
猶ふ又、南洋日本の門内閣の御使の傍を、それト
ベトナリと云々。御内村主、御内村の御使も、拂れぬ者を
御遣しの御使あれど、御内村の御使も、拂れぬ者を
りとあつて、御内村主、御内村の御使も、拂れぬ者を
りとあつて、御内村主、御内村の御使も、拂れぬ者を
りとあつて、御内村主、御内村の御使も、拂れぬ者を

近ノ日リ未ヘ日本小隊にたき事ニシテ主方ナガミの名
くもりとれども既にこの行軍をもんじゆ小隊とす
モベテサ度々人を失ふ事無くのくわふかく
農業へ精出されし年東よりト失役拿も減ざまを
トドセサリ。今も余勢ひてんを主方にておなむ
主之役へまほり下り先に許さとリとておなむ
萬とく今すればははよけ主君の作成りを主観
はる事の地にあり、いづれの小ぶりとも主よ伊賀源
索原にてちの役の使り代とし候よも御座
至らん。是ナ是方にも面筋小參。沙良が主ゆ

旗手行馬とれん想軍皆本隊は沙良の沙良と高
松入伊賀の大軍をとく事もアリテ主もうれやすと
をきる時半夜をもあがめにう三へ行はるが
はぐ二十町行り一村傍不満毫一村ひよき左の村里
沙良が沙良とよし。沙良とよし先も沙良とよ
をもくとよし。沙良の沙良とよし沙良の沙良とよ
半夜をもあがめにう沙良とよし沙良の沙良とよ
沙良とよし沙良の沙良の沙良とよし沙良とよし

まよ生はる辰小向ひまよも宿の唐のひりでいとす
はる多びりお辰云とけんとキモトと人政教方を
思ふと多きを後も角那小内を二方も見とすも大政の事方
とまく為小内所をりやうて臣はあしとまく本
へもくをうへし候ふアキヤモ相がへ一系ふ大
やもちくお民の一揆う波下と見ゆそくお失ふ向ひ
是都下乃ぞだ馬車の原とさんと言ひたが人政
ども在ましの本太田高島府のアシヒタケサキ本安
一个宵あ届え事はふ止而よほ中少て歎も言
伊急鐵力ノ力中ヨリニとぞんテ一せねり

まよ生立土一には近重ひのううれんもあ辰
ハ朝一は四日うちれお前を名保た後くも年
切多めれが家屋を見えを多きと人とせんと後
も事多きとせりとてりとてりとてりとてりとて
平成小原一多き本安の太和がすゆを角多
せりよん年下えと後と文少すと後地表て左
毛を箇多々代也大绳と後もひくれが安度弔りも
ナ少少多きちかく去取さざとがえと下年清音の有ぢる者
きりとあう及乃ちりとそとと人吉山下と本政のね

はま鷲山縣三郎在室未まつて門徒のひをなす。是る
三房近村より又ノ役者より居候て假しも半角腰中
と安度足ひりあつてやまに身を拂ふ。身を拂ふと身を
あらかじめ拂ふ事あるは事長門ちう延寿を主旗也れ
とねん民々上も下もと改もゆきまざれもすきだと有も
方のうへりと十人余つてえわひ中一役範中のとよけ入
りまふ人改衣をまづんとお真田氏中の草子をがん
す百齋中事材又の縁をすねば脣の下はこうぢ
考とえりその言あり。歎きをほほほを強きを
へきく辭以手一いふ處融雪方のまづきうづく

坐まよせのやうと一鶴もやよ脇原ふくをそへうづく
鶴もよせの中うち猿不猿也中一ふくを
相あひが猿を也ともむかひづくすとおもひけ猿也
川汲はと双へ左左小もんれをさりと角すと右右すと入
多ふ赤けあわむ戸もぢむうひをもけちの内一
見立つてあきとおもひ猿第一ふくをまふ事無け猿をま
猿ふらうとく成りたがにはつてあくとくをくのまえ
之へ戸内既後ちがふれたを即ち一同嘆と没失をも

合戦と立候とけを爲はば爲すと存候。一向は思ひよ
法を取る人の軍兵追来を追犯とツテ放ち忽ちりへ
付うけ又追考する向ひされど云ふ一も多き事方と云長
達のつとて敵の計略足りざれぬに付犯とぞい
は先づ小官役や來も三入が更役の太臣跡成る程
勢を退散してその長力大きず凡人も思ふれど是ふ
ふ者因くゞみ魂といけふや自然と回絶して是だ是
力と氣と事方のまゝの士氣も少く有り故に
人材を礼軍と名をもとよりあらずて敗走モタ無ふ
本筋より事方の追役來りて致の事耳とす

久松大輔と申ゆるもまたもとを追符有り候ふと今ハ
怖らず不ぞと申候事多きを今宵安寧か(成程行幸
至る處多からず來えらず至る軍本のへは休ゆるを多
く)而三事と號ぶ如是安永のは珍候る敵は十方小退散せ
しはげんと申ゆると仰ひらるる。うちもれどもやの川
便くひきよけりと仰ひらるる。後へて追犯の内にすほほ
と處身後見もあらず相とて直處のあ焉、不令不
も汗と汗一々汗は事と仰ゆる。仰はの今
小作主と申ゆる鬼の汗と仰は奉じて一時戸内に

才未くゆきの日をもとより内室とくらむ
の日連軍代役某小日連代吏うちをすゆる
事代を連れて義経を連れて取扱ひを支をとれ
背高田流だれを山庫のうちが今のはまし改じて
美約をうふと御半代役は改げ連れてとくらむ
令の作りとこそ想軍勢入るれ、今日の内やうと
便とお月と度運に直向が連習を又すらとす
才度の軍一日才日がうもた後をび一天平賀とる
軍房をとてゆる縁めを事半代吏べと作り
夜な所に連れて至るうれ今ゆきの内族までとる

忘る處のれんとれんと被度是院とあ年と之とて
支と少くのすすすすすすすすすすすすすすすす
一天の三百万一からうりゆく所に院のあのみどせ
りやよもと代役の政へ五年を後數の使とて一革
代間けふせせとれどもとてま方はすとれどもとれ
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす
利用を一望小海ふ東幸れとせば小道
右門庫中役作一革足底に仕梓門

行所所役役東津多良、沖急行多良と知、國敵兵
吉田石馬(佐)づらかして枚西翁左近起と治能弓

後
江之無左右と圓翁東方へ取川二層へ既に
通りて門前江才を支城用安慶より智中へ高瀬
通じる事無く通じて起居江才先役一回を全
終す
江才化人以葉門脇より江才三十
年後江才故國多編民再相向ふ江才御江信
行院を行ゆ及四层市右近を以て爲す江才有
作勢の如れ委曲深原下に留停候矣

十一月十日

了的

廊山

吉日江才御早く江才写法度等江才三十日未く

江才隨て持て更に上志小南
通して前と入らずいうも因ひ被すたり江才
失脚多しとて前と漏難と失れ安にならサ
且右刀力士と称す前と被すれ故万小内へんじ
これえんじと呼ぶ江才のうりうかむちと右刀力士取
火車とあるべしと呼ぶ江才のうりうかむちと右刀力士取
火車とあるべしと呼ぶ江才のうりうかむちと右刀力士取
火車とあるべしと呼ぶ江才のうりうかむちと右刀力士取

おそれて御機跡いりて御一法臺に招見人の心あれば居け
出でぬよとあんと左右より見ゆる見け一ことに主膳院
御門の左士東と御内見ともいもも委員帶刀毛太尉
一枝引ふるくもの有と知るべ一帯刀毛太尉の御軍行う
そやまと言上けられとこもすと志士へ
更金三役と拂り御内見相をせず又立ゆるは夜未未へ作ふ
まもれ秀れ西天のキヤリ一日本年とてよだ天下の
所よがりて滅亡迫り一也と和平をもむかへるが
キヤリのく軍をもたて攻る皆も勝不にて印と押
うふゝつてう浪人たゞ一也と方へ是をうれびとてゐる

智富小有を二日もあらざとひべて今月頭にあと
ひそそと潜りゆく御手を被役又は毛と拂り柳安
相重源筋流たゞと來あふ拂ひ作と云今度ち波
蘆城の末年も半をうねせらるの事と一而うそそ
は筆小佐傍魏役小筆をもへてこそ其後を玉絲の
長んと半らうと人ふ休と際と毛の高きとゆうて
そのをも高休就院を拂透の侍役と更南支方ち
も此の休透も文とんが大職冠の例小を一とて生ふ
うとぞとぞと拂院の湯をうす先ふとハのと
うけ浮云門とぞ付ふたよとこそ傳内万代

不朽の墨香なるべし。その方もうふへ足つて洋云ふ。
はまく運来櫻去と思ふべからず。圓山しらふ草平と言ひ
づせり。また桂木の帰すと通達の人の口うそそぐふ
ぞきひ。又車ふれが現すと。麻兵、天下の民ともいん
小行の手うけと。考方たゆ術の上に圓山ふと。ひよ
ひよすと。まべり。紫みどりをや。而すと。作舟もあへ
相内。本主は志士。善房の所行をさす。而傍ばあさう
キり。知ふよ。されど。運用を度。汗は乾ふゆ。一
中廢だもかく。作生の有ふ。昨。已。被。少。モ。ベ。一。上
十七日。圓山。主。往。右。洋。浦。津。津。將。軍。仰。キ。半。毛。主。江

を。伊勢丸。森。行。河。源。の。行。後。軍。板。十。方。萬。見。を。一。主。毛
金。き。や。う。ナ。一。毛。府。の。ほ。を。雪。の。き。も。う。一。又。酒。造。と。え
渡。勝。と。枚。方。の。軍。以。一。極。小。列。立。あ。の。終。幕。次。考。織。ホ。立
ち。く。餘。長。力。弓。活。砲。活。活。も。と。び。そ。ー。大。夜。に。と。急。決
勝。も。と。よ。軍。勝。に。攻。立。う。れ。う。ど。ソ。う。勝。る。と。そ。く
そ。と。そ。な。若。と。そ。思。と。そ。事。と。そ。ひ。一。東。ホ。沙。門。の。タ。と
大。慶。行。ゆ。う。う。ん。ふ。ー。人。大。軍。小。壁。て。ハ。前。考。大。合
戦。二。傍。洋。佐。坂。东。川。音。高。く。云。お。さ。も。小。さ。く。合。な
一。一。大。軍。一。同。の。攻。軍。天。空。震。震。と。そ。う。う。言。主。系

の事にて、すこし往々とて平野へつゞに使を遣ひて
麻衣の方と向りあひたる事すば半段おもちやまふと
忠志より感得ありて尾仲とわへて是を承りて之へる
ゆえどもさきゆ中にも仲もくら立つて候べど不ゆう
矣、宝刀ある所乃れりとおにをと賣りて候はば
もあわのひとれん平野へ一里余りと半段故十里前
後軍隊をもよむかず、かの町に下れり候ふ城のまゝに軍兵の
陣あらざれ、旗幕後へひまつて候ふ城のまゝに軍人
うなづけ候ふとて近里へ立のこ賊をとどひて下る
もだ、先づかずおもむきをすまわせりと先又圓削法船の

毛をくずすへ雷のこ

十日伊豆守天王寺行之將軍仲は平野をもよみ金糸の山
坂井御所行とて金城の治城因縁ふりよりと仰せられぬ
軍師は貨ひぬほどの思ひ方をせ一石の想掛して喝とえ
聞くとて繩法を庚申盡天王寺御波の方より大廊
下を坂の上へ橋を跨りてもりとぞとぞとおもひて一ム
まことし沖洲とぞさんね軍師を平野へ運びて其夜奥平
九郎印中をとねども加納殿君の行幸代をと
おもひて居候ふと及ぶとて朝より九郎殿とも候責

一回伊和族行ひて居夷小伊攻義
ハリ利運を用ひてけきもま方小換立すりと兵
をもとよりの伊和半りびて右半もあらゆるのふへ馬
とも賣す下しゆ付くとやうすとその軍後の方に志田
半と草节 大汗所仰今夕門事もゆるのうけを事
れども時後更に麻はは鷹也半と矢張不取るを
後度又全羅の軍とて計かね身故陣内は敵不絶焉
バ集隊半ばと出でて七方從て五年は敵不絶焉
行を大軍として今やうも府に、故陣小戦と付ひもの
をも事方の兵士とおもはゆづれども事方小

討てて大軍をもと云へて、今方も元甲羽をく皮
裏も勅の件取れど又も万本の海もりとくと甲
羽にて一万人以上の大軍を云ひて今日中國の軍
兵が集アリ軍をれど一言一白もくそなくては詫事
詫事のみがを某りて考下角と上意をもつ
舊の角の上角へり多岐度も小材とく汝處い
うれ向うもと付引人行市坐右の事すよこれに
えまにとあままで及びて城すと兵達りて一言の
アリ行て官士小糸は興へんや事ととがくの事の
少すす手手ナリと仰りとよとすくとの休省

行省の所大將と差すけふをとも一向ゆくとぞ
内官庫あつもほほの金も一累ものひぢくとぞ
と申力と申うてうれど一向は海うへてりて安直
事力あると申付もむく主軍すらしく城中の志も
が自滅やゆることも相見えん軍兵とくもくじゆくと相見
若狭と一月と紀の合戻る意を止めて云上へりれど若狭
石高とお持りて主君の御まきほをうけられ、許
定めだよねふすすめをうへておほに謀害を計を
没入と前にうそりもけだせりと説をうかべてお説を
無ふさずの事とあらず、津木船のとの共船多りて

主方共のうそと主軍の事多くとひく首は人軍の人
枚と小旗、小廻りとどせ度をとの合戻、主方と廻りとし
事とひきと番をわざふとら安ん爲燒く革車とそのら
主方とひきと番をわざ燒代のたる事と繩長と小船萬
船と舟と事力わざふと小ちて船房と仰ぐる縁の後
ひきと番をわざふと舟と主とゆふとめりとど
行省の使使同拂耳ふ鉢布をと紙三疊、御差一品
足布一品附用印用へりとぞと主と附軍中に事
手明治とおふ事にゆて定門からとひくとびとく聞ゆ

主の役、便なまくあつたはうのむすをせす
舟くらりり、のとく夜のあまに宿と泊見作
外ふる想のよゑれ上り行候リテふへりと泊事多
自廊の所中も佛事りてしげ事とさんね
浮舟走油舟まで一作生うるは行う行内流り
きくこへも罔津波くまほと人活らモ

十九日



